



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

芦名, 定道

CITATION:

芦名, 定道. あとがき. ティリッヒ研究 2002, 5: [1]

ISSUE DATE:

2002-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/57603>

RIGHT:

あ と が き

『ティリッヒ研究』第5号（論文5編、研究ノート1編）をお届けいたします。論文を寄稿いただいた方々、編集事務を担当いただいた方、雑誌刊行のためにご寄付をお寄せいただいた方に対して、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。また、この雑誌の母体である「ティリッヒ研究会」自体も50回を越え、4月より新しいメンバーを加えて、活発に研究活動を続けています。

今回、研究ノートとして収録された鬼頭論文は、鬼頭氏の東京大学文学部哲学専修課程に提出の卒業論文がもとになったものですが、その後、京都大学キリスト教学（大学院修士課程）で行ってきている研究成果の一端です。

最近のティリッヒ研究より、ジョン・F・ホート「進化にめざした神の探究において：パウル・ティリッヒとピエール・テイヤール・ド・シャルダン」（John F. Haught, In: *Search of a God for Evolution: Paul Tillich and Pierre Teilhard de Chardin, in: Zygon. Journal of Religion & Science*, vol.37,no.3 (September 2002) pp.539-553）を紹介します。この論文はホート氏が北アメリカ・ティリッヒ協会の研究会で発表したものですが、雑誌論文として掲載されるにあたって、以下のような要旨が付されています。「ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの神学に対する挑戦は、進化の現実を考慮に入れて神を理解するようにと求めるものであった。パウル・ティリッヒの新しい存在という考えは、この挑戦にかなりの程度応じるものであり、進化の神学は、ティリッヒの宗教思想から多くのものを得ることができる。しかし、おそらくテイヤールは、たとえ＜新しい＞という形容詞によって限定されるにしても、＜存在＞という哲学的概念が、それ自体進化を神学的に概念化するのに相応しいかについては疑問に思うであろう。テイヤールにとって、ダーヴィン以降の世界に合致した神学が要求するのは、何が究極的に現実的なものであるのかについての我々の理解における変革に他ならないのである。ティリッヒの幾分古典的な神学体系がこの要求に十分適応できるだけ徹底的なものであるかは疑わしい。他方、テイヤールにとって、聖書のヴィジョン　そこにおいて、神は、世界がその唯一の支えとしてそこに基礎を置く未来として理解されているは、進化の神学にとって、より相応しい枠組みを提供できるのである。」（p.539）

以上の論文要旨からもわかるように、この論文は、ティリッヒの宗教思想の意味を現代の自然科学の文脈で検討するという最近のティリッヒ研究の動向を反映したものであると同時に、存在論（伝統的な形而上学的存在概念）が変化・生成を記述するのに適切か、ティリッヒ神学と聖書の宗教との関係性をどのように理解するのか、というティリッヒ理解の根本に関わる問題を取り上げている点で、興味深い論考と思われます。

研究会のメンバーを中心に進められてきた、ティリッヒ『平和の神学』の翻訳は、研究会サイドの作業としてはこの7月で終了し、いよいよ出版に向けた実務的な作業段階に入りました。順調に行けば、『ティリッヒ研究』第6号の発行とほぼ同じ頃に、書店に並ぶことになりそうです。ご期待ください。

研究会代表
芦名 定道